

おじいちゃんありがとう

板城小学校

四年

木村

颯良

ぼくが毎日食べているお米は、おじいちゃんがお作^った世界一おいしいお米です。

おじいちゃんには六十年もお米作りをしてい
るお米作りのプロです。

毎年種もみをまいてなえを作ります。

そして田んぼに水をためて、トラクターで
代かきをし、田植えの準備をします。

なえが大きくな^ったら田植えをします。

田植え機に乗^って田植えをするおじいちゃん

人は、イキイキしていてもか^っこいいで
す。

ぼくがおじいちゃんちに行くといつも田
んぼに出かけていて、暑い中草をか^ったり、田

んぼの水を見まわ^ったり、いそがしく田んぼ
のお仕事をしています。

ぼくは、田んぼのお仕事は大変な人だと分
かり、ちよ^っとでもお手伝いをしようと思^っう

ようになりました。

いねかりの時、手でかったいねをおいぢや
人にあたしてあげたり、もみをかんそう機に
入れる時、手伝ったりしました。
いねかりが終るとおいぢや人が
「今年も一等米だ」たよ。
とうれしそうにほうくしてくれます。ぼく
は、お米作りの大変さを知っているので、ぼ
くも一等米だ。た事を聞くと、てもうれし
くなりました。

おいぢやんのお米作りは、今までいろん
な事がありました。

西日本ごう雨の時は、田んぼに土しやが流
れてきて、田植えをしたなえがダメになりま
した。それでもおいぢやんは、がんばって
お米作りをしました。

おいぢやんが病気で入院した時は、田ん
ぼの事をいつも心配していたり、たい院した
ばかりなのに次の日には、コンバインに乗っ
ていねかりをしておきました。ぼくは、おいぢ
ぢや人は本当に田んぼを大切にしておいて、一生け

人命お米を作ってくれているんだなと思いま
した。

いろんな事があった。たおじいちゃんのお米作
りも今は、思い出になっでしまいました。

世界一おいしいお米を食べれるのも、あと
少しです。去年のお米がなくなっでしまうと、
もう食べる事が出来ません。

なぜかと言うと、おじいちゃんは今、天
国に行っでしまっだからです。

いつも、田んぼでお仕事をしてくれていた

おじいちゃんがいなのは、とてもさみしい
です。今までおいしいお米を作ってくれてい
た事をぼくは、おすれません。

そしてぼくが大きくなった時、おじいちゃん
のようにおいしいお米を作っでみたんです。

おじいちゃんを作っでくれた、のこり少な
いお米を、一つぶ一つぶ大切に食べさせても
らおうと思います。

天国にいろおじいちゃん、今まで世界一お
いしいお米を作っでくれて本当にありがとう。